

※ 解答にあたっては、句読点などの符号も一字分として数えること。
また、書きぬき問題の場合は、設問のための記号は字数に数えないこと。
なお、「二」の文章は、問題の都合上、本文の一部を変えてあります。

【一】次の各文の——部のカタカナをそれぞれ漢字に改めなさい。

- 1 運動会で転んでフシヨウした。
- 2 世界記録をジュリツする。
- 3 台風のヨハで風が強い。
- 4 全国優勝のカイキヨをなしとげた。
- 5 タンザクに俳句を書く。
- 6 開会のジを述べる。
- 7 一代でザイをなした。
- 8 仕事を力ねて旅行をする。
- 9 海にノゾんだ土地に工場を造る。
- 10 毛糸で手袋をアむ。

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「動物の本能」とか「野生の本能」といった言葉が示すとおり、動物は多くの場合、生まれ持った判断力である「本能」にしたがって行動する。

しかし、猿に芸を仕込むことが可能であり、また警察犬など、動物に特別な訓練を施すことも可能であることから、動物も経験を積み、学習することで「直感力」を備え、A 鍛えることすら可能であることがわかる。

「本能」とは、生物種それぞれに基本的に備えられている、経験や学習によらない行動パターンであるが、「本能」によらない行動パターンを身につけることが、「学習」だ。たとえば、繰り返し仕込むことで、飼い犬に「お手」や「お座り」を覚えさせることが学習である。

あえてあれこれ仕込まなくても、動物が「経験に学ぶ」ということもある。動物の「本能」ではなく「直感」とは、そのようにして鍛えられていく。

たとえば、将来の結婚相手を紹介したいということで、あなたの娘さんがボーイ・フレンドを連れてきたとしよう。あなたはその男を見て、① 何か腑に落ちない感じを抱いたとする。「どこがどう」とは言えないのに、どことなく気持ちが落ち着かない。あえて言ってみれば、「生理的に気にくわない」のだ。

② そのとき、あなたが抱きかかえている犬が、唐突に男に向かって吠え始める。普段はおとなしくて、お客さんに向かって吠えたりすることはないので……。男に向かって謝りつつも、あなたの疑問は大きくふくらみ、後日、男について詳しく調べることにする。すると男が、結婚詐欺師だったことが判明する。

こういう話はよく耳にするし、こんな話を聞くと人は、③ 「動物の直感力」や「本能の力」を賞賛する。たしかにこれは、飼い犬の「直感力」が発揮された例だが、この犬は実のところ、男が結婚詐欺師であることを見破ったのではない。そこまでは犬にはわからない。犬は、飼い主の態度がいつもと違うと、「直感的」に判断したのである。

これは犬の「本能」ではない。生まれつき飼い主の気持ち判断する能力を、犬は持ち合わせていない。飼い犬と飼い主の、「長いつき合い」のなかから、徐々に「飼い主」の態度と気持ちについて、飼い犬は学習していくのである。

結婚詐欺師をうさんくさく感じたのは、人間のほうである。犬ではなく人間が、結婚詐欺師の「うさんくささ」を嗅ぎとったのだ。ただしそれを、「そんなことを考えるのは失礼」とか「ばかっている」「気のせい」といったもつともらしい判断のもとに、抑圧してしまう。しかし抑圧後も、何かを感じつつづけているのである。抑圧したからといって、感覚や感情が消えてなくなってしまうわけではない。人間はさまざまな事情から、「直感の声」を抑圧しようとすることが多い。何となくうさんくさいと感じていても、そう判断することが、はばかられる場合はよくある。犬のように、けたたましく吠えたりたりできるものではない。つまり、④ 「直感」が働いたとしても、それを押さえ込んで、忘れてしまおうとするのである。これでは、結局のところ、直感力は発揮できない。

たとえば直感的に「逃げろべきだ」と感じるような、屈強で目つき悪い人々に取り囲まれても、動物が一目散に走り去るようには、人間は逃げ出すことはできないかもしれない。「それでは男として恥ずかしい」というような社会的圧力が、逃げ出すという行動の妨げとなるのだ。そうして結局その場に踏みとどまることにしたのであれば、「逃げ出すべきだ!」という直感的判断はB 邪魔になる。ゆえに抑圧する。こうしたことを繰り返すうちに、直感力そのものを減衰させる人が、たくさんいるのである。

そもそも人間は、「グループ・プレッシャー(同調圧力)」にたいへん弱い。

ペンシルバニア州のスワースモア・カレッジのソロモン・アッシュ教授が一九五一年に発表した、きわめて単純な実験の結果が、⑤ グループ・プレッシャーの力強さをまざまざと物語っている。カードに書かれた線分を見せられ、「これと同じ長さの線分を、次の三つのなかから選べ」という問題を与えられたとき、これが非常に容易に解ける問題であっても、強力なプレッシャーのもとでは、正解が選べなくなるのだ。強力なプレッシャーとは、正しい解答を選んだときに、周りにいる人間が、「お前、おかしいんじゃないのか?」と言わんばかりの目でにらむ、という程度のものだ。

動物の直感と似た事情は、大人と子どもの直感力についても当てはまる。つまり、子どもよりもはるかにたくさん経験を経験することによって、大人のほうがはるかに洗練された「直感的判断力」を有している。犬に結婚詐欺師が見抜けないように、幼児が結婚詐欺師を見抜くことも、困難だ。

しかし、「場の空気」におかしなものを感じれば、年端のいかぬ子どものほうが、そのことを率直に表現できる。大人が苦手とするのは、そのことなのだ。

C 経験を積んだ大人が、社会的圧力やその場における事情などに影響されることなく、直感力を率直に使えば、幼児以上の能力を発揮するのはたやすい。経験と知識によって、その直感力には磨きがかかっているからだ。

ジーン・ピアジェという発達心理学者が考案した有名な心理実験

がある。この実験は、子どもの直感力が大人に比べてしばしば不正確であることをよく示している。

幼稚園の先生などはご存じであろうが、幼稚園児にまず同量の水の入った二つのコップを見せ、次に一方を細長いビーカーに移し、一方を底の広い太ったビーカーに移す。同量の二つのコップから、それぞれ別の形のビーカーに水を移しただけだから、移された二つのビーカーの水も当然同量である。

しかし、幼稚園児には、「直感的」にそうでないと感じられる。細長いビーカーの水が「多い」と答えるのである。そう答えるのは、そのように「見える」からであろう。

幼稚園児のころにはまだ、物質や液体の「容器」を変えても、量が増えたり減ったりしないという D 大人であっても、容れ物を移すだけで水の量が増えたり減ったりすると感じてしまうだろう。

私たちがそのように「感じない」のは、体験を記憶し、教育を受けた結果、直感を洗練させ、変化させているからだ。そのような意味で、大人の直感は子どもの直感よりも、優れているといえるのだ。大人の直感のほうが子どもの直感よりも優れていたとしても、それには社会的圧力のような要因に、自らの判断力を歪められなければ、という条件がつく。子どもや動物は、直感的判断をすぐ口に出したり、行動に移したりできる。そのために、^⑥ 彼らの直感が「正しい」ところを、私たちはしばしば見せつけられて、驚かされるわけである。

(佐々木正悟『脳は直感している』による)

問1 A D に入る言葉として適切なものを、それぞれ次から選び、記号で答えなさい。

ア もしも イ たとえ ウ むしろ
エ すこしも オ さらに

問2 部①「何か腑に落ちない感じを抱いた」とありますが、これは男に何を感じたということですか。文中から五字以上八字以内で探し、ぬき出して答えなさい。

問3 部②「そのとき、あなたが抱きかかえている犬が、唐突に男に向かって吠え始める」とありますが、このとき犬が吠えたのはどうしてですか。「くから」に続くように文中から二十五字以内で探し、はじめと終わりの五字を答えなさい。

問4 部③「動物の直感力」や「本能の力」とありますが、「直感力」と「本能の力」とはどのように違うと述べられていますか。文中の言葉を用いて四十字以上五十字以内で答えなさい。

問5 部④「直感」が働いたとしても、それを押さえ込んで忘れてしまおうとするのである」とありますが、人間がそのようにしてしまうのはどうしてですか。「くから」に続くように文中から二十五字以内で探し、はじめと終わりの五字を答えなさい。

問6 部⑤「グループ・プレッシャーの力強さ」とありますが、それを重要な要素として含んでいる話として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア アリとキリギリス イ 大きなかぶ ウ 赤ずきん
エ はだかの王様 オ 北風と太陽

問7 二か所ある に共通して入る五字の語句を文中から探し、ぬき出して答えなさい。

問8 部⑥「彼らの直感が『正しい』」ところを、私たちはしばしば見せつけられて、驚かされるわけである」とありますが、この部分についての説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 子どもの直感が「正しい」ことを見せつけられた大人は、体験を記憶し、教育を受けた結果自らの直感力を変化させてしまったことに気づき、驚いてしまうのである。

イ 大人は自らの判断力が歪められている事情を自覚しているので、子どもの直感にすぐついていくことは難しく、子どもが直感通りに行動すると驚いてしまうのである。

ウ 判断力を歪められていても、大人の直感は感覚としては消えてなくなることはないのも、子どもの直感の正しさにすぐ気づくことができ、そんな自分自身に驚いてしまうのである。

エ 本来は大人の直感のほうが優れているはずだが、自らの判断力が歪められているので、子どもがそのまま口にした直感のほうが優れていると感じ、驚いてしまうのである。

【三】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

I から II へと移り変わっていくこの季節には、ありとあらゆる生きものが子育てにいそしむ。草を刈っていたら野ネズミの巣(子ネズミ入り)が現れたり、畦道の先をタヌキが子連れで横切ったり……。

うちの馬小屋には今年、ツバメが巣をかけた。大きな梁の真ん中、人に観察はされるが邪魔はされないという ① 絶好の位置だ。

チーチージュクジュクキュイキュイ、とさえずりながら慌ただしく出入りする親鳥を、馬小屋の屋根によじのぼった猫たちが一日見張っている(でも届かない)。その猫たちを、犬たちが下から見あげては吠えまくる(でも届かない)。

シートと彼らを黙らせながら一緒に見あげると、のどの赤いヒナが競って口をあけているのが見える。ポケットのような形の巣は、泥を唾液で固めて作るものらしい。昔は人間の家も地方ごとに土塀や塗り壁の色が違ったというけれど、② 彼らの巣はいまだにそうなんだろう。

毎年、こうしてツバメを見るたびに ③ 思い出してしまうことがある。

小学四年生のキャンプ。学年全員が、四台のバスに分乗して遠出をした帰り道のことだ。

バスの待つ駐車場まで列になって歩いて戻る途中、私は、とある家の前の溝に落ちていたツバメのヒナを見つけて動けなくなってしまう。みんなが押し合いへし合いして覗きこむなか、④ うずくまっているヒナを両手ですくいあげる。くちばしなんか文字通りまだ黄色くて、ちよつと押してもつぶれてしまいそうだけれど、前にスズメだつて育てたことあるもの、きつと大丈夫。

と、滞る列を不審に思った先生が走り寄ってきた。

「そこ、何してるの! 道草してないでまっすぐ歩きなさい!」

「先生、見て、ツバメの子が……」

最後まで言う暇もなかった。先生は一瞬迷いこそのしたものの、すぐにヒナをひったくるようにして私の帽子に入れると、列のほうへぐいっと背中を押しやったのだ。

交通量の多いところだったから先生も 1 していたのだろうと、今だからわかる。でも当時の私は、大好きな先生の険しい横顔と、押された力の思いがけない強さにすっかりすくんでしまい、バスが動きだしてから帽子の中のヒナを眺めるふりを装って A うつむいていることしかできなかった。

けれど、バスは五分ほど走った後、するすると路肩に寄って止まった。運転席のほうから無線でほかのバスとやり取りする声が聞こえ、やがて男の先生が私の席へやって来て、ひどく優しい声で言った。

「そのヒナはここに残していこう。生きた餌しか食べないから僕らにはとても育てられないけど、ここならお母さんツバメが見つつけて餌を運んでくれるから。ね？」

まわりじゅうの視線が注がれていた。私のせいで四台ものバスが止まっているのだ。巢からこんなに離れた今、お母さんツバメ云々という先生の言葉がその場を丸くおさめるためのウソに過ぎないことくらい子供心にもわかっていった。でも私には何も言えなかった。そんなのウソだよ、と言ってしまったが最後、ヒナを守るために先生たちと戦わなくてはならなくなる。ああ、こんなことなら拾ったりしなければよかった。せめて元の場所に帰してやれたら……。

結局、しばらくして、バスは再び走り出した。

III

先生たちばかりかクラスのみんなまでがほっとしているのを肌で感じながら、私はやっぱり B うつむいていた。 ⑤ あのヒナを守らずに自分自身を守ってしまった、そう思うといたたまれなさに顔が上げられなかった。か細いヒナの鳴き声が耳に残って、涙がこぼれそうだった。

あれから三十年ほどがたつというのに、いまだにツバメの姿を見るたび胸の奥が 2 するのはそのせいだ。しようと思えば出来たのにしなかったこと——そういう後悔ほどいつまでも尾を ④ もたない。

ツバメといえば、その翌年、五年生になった私たちの担任の先生が、授業中にこんな話をしてくれたのを覚えている。

「うちの息子ったら、学校でツバメの巣にわざとボールをぶつけて壊して、叱られたのね。先生に謝りなさいって。そうしたら何て答えたと思う？ 『ツバメには悪いことしたから謝るけど、先生には謝らない』って。もう、屁理屈ばかり」

クラスのみんなと笑いながらも私は、(それって屁理屈のかなあ)と思っていた。屁理屈どころか、しごく真つ当な理屈のように思え、その言葉の強さに、いや、そういう言葉をきっぱり口に出せる子の強さに、ものすごく 3 した。

と同時に、なぜだか少し、居心地悪くもあった。

おそらく、そのとき私は生まれて初めて、自分に足りないものについて考えたのだと思う。

⑥ あの頃の私に欠けていたものが、今の私に備わっているかといえば、正直なところ、やっぱり自信はないのだけれど。

(村山由佳『楽園のしっぽ』による)

問 1 I・II に入る季節として正しいものを次から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 春 イ 夏 ウ 秋 エ 冬

問 2 ①「絶好の位置」とありますが、誰にとって「絶好」なのですか。適切なものを次からすべて選び、記号で答えなさい。

ア ツバメ イ 馬 ウ 猫 エ 犬 オ 筆者

問 3 ②「彼らの巣はいまだにそうなんだろう」とありますが、どうして「そう」なのですか。その理由を三十字以内で答えなさい。

問 4 ③「思い出してしまふことがある」とありますが、「思い出すことがある」という表現と比べると筆者のどのような思いが強く伝わりますか。「〴〵の思い」に続くように文中の語をぬき出して答えなさい。

問 5 ④「うずくまっているヒナを両手ですくいあげる」とありますが、筆者はどうするためにそうしたのですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 巢にもどしてやるため。

イ 家に連れ帰って育てるため。

ウ 大好きな先生に見せるため。

エ 他の人に取られないようにするため。

問 6 1 3 に入る言葉として適切なものを、それぞれ次から選び、記号で答えなさい。

ア しくしく イ くよくよ ウ びりびり

エ クラクラ オ ビクビク カ ドキドキ

問 7 ⑤部 A「うつむいている」・B「うつむいていた」とありますが、このときの A・B それぞれの気持ちについて最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 先生に注意されたことをはさしく思っている気持ち。

イ 先生に背中を強く押されて落ちこんでいる気持ち。

ウ 予想外の展開にとまどって動揺している気持ち。

エ 自分の弱さに対して罪悪感を抱いている気持ち。

オ 自分の思いが理解されずすねている気持ち。

カ ヒナに同情して悲しくなっている気持ち。

問 8 III に入る語句として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ピイピイと鳴くヒナを、元の場所に帰してやって

イ ピイピイと鳴くヒナを、先生に取り上げられて

ウ ピイピイと鳴くヒナを、道路脇の草むらに残して

エ ピイピイと鳴くヒナを、そのまま抱きかかえて

問 9 ⑥「あのヒナを守らずに自分自身を守ってしまった」とは、具体的にはどのようなことを言っているのですか。五十字以上六十字以内で答えなさい。

問 10 IV に入る二字の言葉を答えなさい。

問 11 ⑥「あの頃の私に欠けていたもの」とは何ですか。文中の言葉を用いて三十字以上三十五字以内で答えなさい。

受 験 番 号

問 1

A
B
C
D

問 2

問 4

問 6

問 7

問 8

問 1

I
II

問 2

--

問
3

問 4

の
思
い。

問 5

問 6

1	
2	
3	

問 7

A
B

問 8

--

[illegible]

問
10

問
11

I	H	G	F	E	D	C	B	A

右のらんに
は何も書か
ないこと